



日本とちょっと違うよ - 通訳者よもやま話 - Vol.15 ベトナム語担当 ゆんさん

ベトナムでは、韓国や中国、そして日本のテレビドラマがたくさん放送されています。10年くらい前まで海外ドラマの吹き替えは、出演者全員のセリフを活動写真弁士のように一人が全てベトナム語で語る方式でした。元の外国語音声がかみこえる中、それよりも大きな吹き替えの声で被せて話すのです。今では、ほとんどの海外ドラマは出演者ごとに吹き替え担当者が当てられるようになり、とても聞きやすくなりましたが、時々昔懐かしい弁士方式のドラマが放送されることもあります。



ドラマだけでなく、以前は映画の上映も弁士方式の吹き替えでした。ベトナムでは、映画はあまりポピュラーな娯楽ではありませんでしたが、最近では都市部を中心にシネコンもたくさんできて、ハリウッド映画や日本映画も出演者ごとの吹替版や、ベトナム語字幕付きで上映されています。



私も、先日里帰りした時に、実に20年ぶりに映画館へ行きました。映画の本編が終わりエンドロールが始まるとほとんどの人が席を立てて退席しました。日本でもエンドロールを見ずに退席する人はいますが、ベトナムだとこのタイミングで照明が点灯するんです！そして、なんと場内の清掃まで始まります。私はエンドロールを見ていたのですが、その中でも手に持っていたポップコーンやドリンクの容器などのゴミがどんどん回収されていきます。すっかり日本式に慣れ、初めは少し驚いた私もすぐにベトナム感覚を取り戻し、清掃が続く中、最後までエンドロールを見続けました 😊



通訳者からのおススメ
～Vol.5～

「民間救急」



9月9日は「救急の日」。コロナやインフルエンザの流行に加えて、今年の夏は特に暑かったせいか、各地で過去最多の救急出動件数だと報じられていました。出動件数が増えれば重症患者の搬送に影響が出てしまうため、緊急性の低い傷病者を運ぶ「民間救急」の活用も進められているようです。

そこで思い出したのが、映画「ミッドナイトファミリー」。メキシコシティを舞台に、民間救急で生活する家族のお話です。人口900万人に対し公営の救急車は45台にも満たない中、彼らが専門訓練も受けず、認可も得ていない営利目的の救急隊という闇ビジネスに手を染めて窮地に陥るといったストーリーです。日本では闇救急車は存在しないと思いますが、外国の救急事情を垣間見ることが出来ますよ。



今月のトピックス

「医療通訳勉強会 - 精神科の講義」

以前にもお伝えしたことがありますが、Medi-Wayでは毎月1回勉強会を開催しています。顧問の先生だけでなく、時には外部から講師をお招きして、さまざまな医療知識の解説や医療現場の様子を学ぶことができます、とても貴重な時間です。

先日は精神科の医師にオンラインで講義をお願いしました。コロナ以降、私たちへの通訳依頼を見ても「うつ病」などの精神科症例が増えていると感じています。一方、子どもたちの「ADHD（注意欠如・多動症）」や「自閉症」の通訳も時々あります。今回の講義で、精神科の診察に欠かせない「問診」と「薬の処方」について、詳しく聞かせていただきました。

どんな症状があるか、患者さんによっては表現がいろいろなので通訳者は聞き取りに集中します。医師側も「眠れない」のは、なかなか寝付けないのか、夜中に何度も目が覚めて眠れなくなるのか、など詳しく確認されます。また、来日前からすでに治療を受けていた場合、海外と日本で同じ薬がないこともあります。通訳者にとっても、海外の薬の名前を正確に聞き取ることは時に至難の業です。

講師の「精神科は言語（共通言語）が治療の手段です」という言葉がとても心に残りました。正確に聞き取り、正確に伝える、共通言語の担い手として私たち医療通訳者の努力が患者さんの治療に貢献できるよう、本講義を活かしていきたいと思えます。

